特集：「要保護児童の愛着の絆を取り戻すために」2

私にとっての愛着
～施設で育って思うこと～

編集部　あいさんテラス　加藤 眞由美　宇　宙　坂　直道
豊橋ひかり乳児院　渡邊 美香　知多学園 松籟荘　佐々木 仁美

愛着ってとても大切なことと
施設で働いている職員は
みな思っていると思います。

愛着を築くために、
子どもとどのようにかかわっていますか？
何が大切かと思いますか？

はじめに

近年、児童養護施設においても小規模化が進み、「家庭的」と言われるフレーズが頻繁に使われるようになってきた。

児童福祉法第48条の3では、「乳児院、児童養護施設、障害児入所施設、情緒障害児短期治療施設及び児童自立支援施設の長並びに小規模住居型児童養育事業を行う者及び里親は、当該施設に入所し、又は小規模住居型児童養育事業を行う者、もしくは里親に委託された児童及びその保護者に対して、市町村、児童相談所、児童家庭支援センター、教育機関、医療機関その他の関係機関との緊密な連携を図りつつ、親子の再統合のための支援その他の当該児童が家庭（家庭における養育環境と同様の養育環境及び良好な家庭的環境を含む）で養育されるために必要な措置を採らなければならない」と明記がある。今回はこの条文の「家庭における養育環境と同様」という点に着目し、それを児童養護施設の児童への支援にどのように活かしていくべきかを考えた結果、「愛着」をテーマとした。

そこで、自身も児童養護施設育ちであり、子育て支援事業や自立援助ホームなど多方面から社会的養護に尽力されている蛯沢光氏、乳児院、児童養護施設で育ち現在保育士として働くKさん2人にインタビューをさせていただく運びとなった。

あたたかい雰囲気の中で

編集部　知多学園 松籟荘　佐々木 仁美　宇宙　坂 直道

蛯沢氏は幼少期に家庭での事情から児童養護施設に入所し18歳まで施設で生活をしていた。

現在でも当時の施設職員とつながりを持ち、そして当時施設で関わった職員たちに対し感謝し自慢に思っているという。

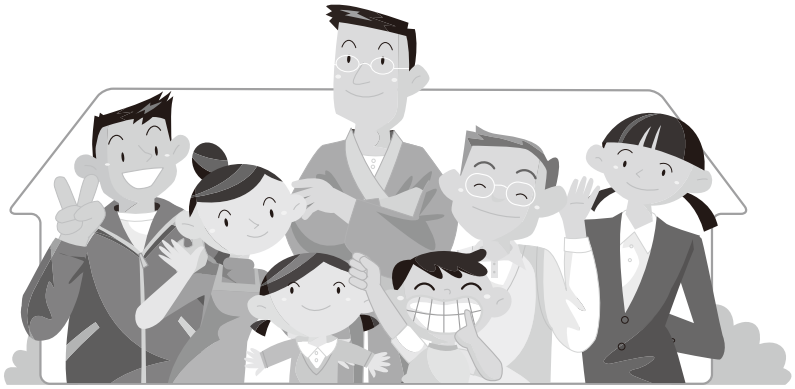
以下、蛯沢氏へのインタビュー内容を掲載する。

自身の児童養護施設での生活

当時の児童養護施設は現在のように施設の設備や環境は整っていなかったが、不便さの中にも学ぶことがたくさんあった。子どもの頃、自転車がパンクしてしまうことが多々あったが、いつも職員がパンクを修理してくれたり、時には職員と一緒にパンク修理などをしていく中で、物の修理や工作は多少できるようになり、自信につながった。最近では幼児がままごとをして遊べるキッチンを自身で作成したりもしている。

時には職員へ怒りをぶつけてしまうこともあったが、職員はいつでも自分たちの言葉に耳を傾け、どうしたらよいのかアドバイスをくれた。施設の職員は、自分たちが生きて行く上でのモデルにもなっていったし、理想の人でもあった。職員の中にはもちろん苦手な人はいたが、嫌いということはなかった。

施設での手伝いも役割は決まっていたが、決まっていること以上に小学生の風呂の介助をするなど自分から進んで手伝いをしていた。職員は児童にけんかやト



ラブルがあっても、年上児童が一方的に悪いと決めつけることなく、年下児童にも原因があると年上児童の気持ちも汲みとって支援してくれた。また、子どもたちだけで少しずつお金を出し合い、母の日にはサプライズで施設長（女性）にプレゼントを贈ったこともあった。

小、中、高校の先生との出会いも自身にとって大きく、どの先生も親身になって自分のことを助けてくれた。そういった学校、地域の方にも支えられていたことも今の人間形成にも生かされているように思う。

施設で生活する中、子どもながらに「さみしいな」と思うことはあったが、職員には大事にされ、人として尊重されていた。自分の気持ちや心をさらけ出しても受け止めてくれていた。

職員が全力で自分たちの生活の支援に当たってくれていた。

今考えると当時の職員は辞める人が少なく、職員間も仲が良く連携がとれていた、職員が働きやすい環境だったように感じる。職員から児童への思いやりや人の温かさを感じられるような施設だった。

施設に入所した理由が虐待ではなかったこともあり、5歳まで親元で育ったが、その記憶はない。その後、施設に入所し、大学を出て改めて幼児期の「愛着」の大切さを感じた。

24時間365日一緒にいるから愛着関係ができるとは思わない。しかし職員が変わらないのは大きい、同じ時間を共有できるから。職員は子どものために時間をかけ、考え、思い、願い、向き合えるか。

子どもが大切にされていると実感できているか、根っこの部分が大切なのでしょうね。

自立援助ホーム「いっぽ」での支援

自立援助ホームでは、就職の支援などはもちろん大切だが、コミュニケーションを大切に日々、生活を共有している。まずは入所してくる児童のことを知ろうとする職員の姿勢が大切である。入所してくる児童はどこか目がつり上がっているような気がするが、子どもと対等に話をすることで朗らかな表情に変わっていくのが目に見えて分かる。もちろん失敗することもたくさんあるが、その都度、次にどうつなげていくのか、児童の要望を聞きながら自己決定をしていく。職員は上から指導するのではなく、一緒に考えるという姿勢が愛着形成に大切である。また、職員体制も職員一人一人が問題を背負い込まず、周りのサポートを受けながら、時には施設外からスーパーバイズを受けて日々の支援に当たっている。

人の温かさを感じる時期は遅かったけど自立援助ホームいっぽに来て良かったと思えるように困った時に頭をよぎる人、場所でありたいと思う。

子育て支援事業に携わって

蛯沢氏自身は施設入所時の5歳までは親元で生活していたが、その頃の生活の記憶はないが、自分のことを肯定し、人のこと信頼でき、自信がもてるのは幼少期の頃に父と母が大事にされていたからではないかと思う。改めて5歳までの育ちが大切だと感じ、子育て支援業務に携わっている。

蛯沢　光氏

NPO法人ひだまりの丘：副理事長、事務局長
NPO法人なごやサポートみらい：理事長

ひだまりの丘
http://hidamari-oka.org/main/

ベビーシッター☆AgReE★

子育て中の家庭から依頼を受け、自宅や指定された場所でベビーシッター業務をしている。食事、入浴、寝かしつけ、学童や園への送迎など、さまざまな依頼を受入れている。

児童養護施設の学習支援SLOW

家庭の事情で親と過ごせない2～20歳までの子どもたちが生活する施設で、小、中学生を中心に学習支援を行っている。児童養護施設で保育士や養護教諭を目指す学生スタッフたちが主体となり活動をする。学習だけでなく、一緒に遊んだり工作をしたり、子どもたちと触れ合い、共に育ちあっている。

家庭教師SLOW

主に大学生のお兄さん、お姉さんが活躍している。子どもの気持ちに寄り添い、コミュニケーションを深め、信頼関係を築くことを大切にしている。一人一人の子どもの個性に合わせた学習内容をその子に合わせて行うことを心掛けている。

【地域子育て支援拠点】

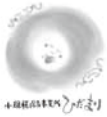
おもちゃのおうち

親子の交流の場だけでなく、ひだまりおもちゃ図書館としておもちゃの貸し出し事業や絵本の読み聞かせや、お誕生日会、造形イベント、親子クッキングなどのさまざまなイベントの実施をしている。

おやこのおうち

季節に応じた遊びの提供や木のおもちゃがたくさん室内にあり、自由に遊べる環境を提供している。また、週に1回出張広場を開催している。

【小規模保育事業所】



ひだまり

0～2歳児までの小規模保育事業所を「遊び」「食事」「睡眠」を軸に毎日の暮らしを大切にしている。

こびとのおうち

駅近くの賑やかな街の一角に小規模保育事業があり、クッキングや畑での収穫体験ができる場を提供している。

特集：「要保護児童の愛着の絆を取り戻すために」2

18年、施設で育ち保育士になって

～乳児院で働く職員の思い体験レポート～

編集部　あいさんテラス　加藤 眞由美　宇　宙　坂　直道
豊橋ひかり乳児院　渡邊 美香　知多学園 松籟荘　佐々木 仁美

施設職員保育士1年目のKさん
生後9日で乳児院に入所、3歳になる前に児童養護施設に措置変更となり18歳で退所。退所してから一人暮らしをしながら進学して夢であった保育士資格を取得。現在、自分が育った乳児院で保育士として働いています。

以下、Kさんのインタビュー内容を掲載する。

自身の生い立ち　親への思い

母親が病気で子育てができないということで入所していました。母親が入退院を繰り返していて調子の良い時には面会も来てくれていたけど、私は子どもの時、母親が苦手でした。ちょっと変わっているのかもしれませんが、普通の子どもだったら結構お母さんが来たらうれしいはずなのに私の場合はそういった気持ちになれなかった…。ここが家だったから私の中で、お母さんとは思えなくて逆にお母さんが他人みたいに思えていました。

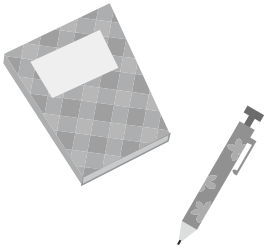
面会があっても押入れに隠れたりもしていました。

小さい時、母との外出ですごく泣いていたと職員から聞いたこともあります。

中学生ぐらいになるとお母さんも面会にあまり来なくなりましたが、お年玉とか現金書留は送ってくれていました。卒業するまでほとんど面会はありませんでしたが、大学で一人暮らしを始めてすぐの時に、ここの院長が、「お母さんが新しい住所を教えてほしい、連絡先を教えてほしいって言っているよ、1回連絡してあげたら」と言われて、私は嫌だったのですが、いい加減ちょっと向き合わなきゃと思い自分から連絡して会ってみました。本当に心臓がバクバクでした。

会った時は初めて会うみたいな感じで、でも会ったら、なんか自分が想像していたお母さんとは違っていて…。お母さんは恐いイメージがあったのですが話してみたら、これがお母さんなのかと思いました。お母さんが「ごめんね」って言うので…。私は「施設に預けられて良かったよ。今すごくいい出会いがあって幸せでいられている」と答えました。お母さんは「ありがとう、そう言ってくれて良かった」と安心したようでした。

それからはそんなに連絡を取ってないのですけどね。



編集部 生い立ちは、職員から聞いたの？

Kさん そうです。小学校の高学年の時と高校入ったくらいの時に職員に聞きました。

編集部 自分が知りたいと思い聞いたの？

Kさん 何故ここに入所しているのかと疑問に思うのが遅くて、不思議に思っていなくて、違和感持ち始めたのが小学校高学年か中学校くらいの時でした。「私って…」何故？と思って職員に聞きました。「親が病気をしていて…」と入所理由を聞いた時は、なんかなんとなくは分かっていたのでそんなビックリもせず「ああ、そうなんだ」っていう感じでした。

編集部 ライフストーリーワークで生い立ちの整理とか子どもたちには知る権利がありますからね。子どもが知りたいって言った時に伝えるのがベストかなって思っていますが、年齢に合った教え方、時期もありますよね。乳児院という安心感のある中で育ってきているから、今まで特に生い立ちについて何も不思議に思わなかったのでしょうね。それで、ふと年頃になってきて余裕ができた時に聞きたいなって思ったのかなと話を聞いて感じました。

編集部 自分の気持ちの中に受け入れる体制ができ整理する力、向き合う力ができたことで自身の生い立ちに向き合えたのでしょうね。

施設での生活と職員について

編集部 施設で生活をしていて反抗したり暴れたりしなかったの？

Kさん 暴れたりというのは…無かったです。でも中学校の時には結構、ルールが多くて友達の家と施設を比べて、18時に帰ってくる？「ありえん」みたいな…。

ご飯の時間もお風呂の時間も全部が決まっていて、でもまぁ集団生活だから、今思うと仕方ないなって思うのですけどね。

編集部 施設での生活はルールが多いですよね。

Kさん うん。すごく嫌だった。

暴力的な反抗は無いですけど、友だちの家で「寝ていた」とか言って19時半とか20時とかに帰るみたいなことはしていました。高校の時は、もう21時過ぎとか22時近くぐらいまで外出していても「バイトやっていたので遅くなりました」と言えばなんとか良かったかな…。

編集部 アルバイトするにも、携帯電話を持つにも約束があったりして。職員はルールを守りなさいと口うるさく言うよね。でも施設の職員になろうって思ったのは何故ですか？

Kさん 私、今まで担当してきてくれた先生が本当にいい先生たちばかりで、その中でも2人すごく心に残っている先生がいます。1人が児童養護に入ってすぐに担当してくれた先生で、その人はこの道40年の大ベテランの

先生で、その先生は、担当をはずれても、ずっと私のことを気にかけてくれていました。里親さんとかもいたのですが合わなくて毎回駄目で…。担当職員が里親ボランティアに登録してくれて小学校低学年の時から高校卒業するまで、ずっと家に連れて帰ってくれました。だから、その人が言っていることはすべて正しいじゃないですけど素直に聞けました。

私の理想像っていうか、その人が私の中では母親みたいな感じでした。もう1人心に残っている先生がいるのですが、その先生は、幼稚園の時にお世話になった先生で、結婚退職するまでの4年間担当してくれていました。

ベテランの先生と仲良くしていて私の話とかも共有していたみたいです。結婚退職をしてからもずっと私と手紙交換をしてくれていました。私が悪いことをしたときも手紙がきました。

何というか…見てくれているっていう安心感があって気にかけてくれているのだなと実感できていました。ベテランの先生とは、今でも月1回はご飯食べに行っています。結婚退職した先生とは携帯持つようになってからは、携帯でも、連絡を取り合ったりしています。先生たちがいたから職員を信じることとかもできました。

編集部 幼稚園の頃に担当してくれた先生のことも覚えているの？どういう関わり方が自分の中で残っている？

Kさん 普段からすごく優しくて、でも悪い事したら自分のことのように考えて、怒ってくれて…。気持ちが伝わってきました。でも、本当に優しいというイメージが強いですね。

編集部 同じ職員が24時間ずっと一緒にいられるわけではないよね。職員は交代するしね。そういう中でも愛着を感じることができた？

Kさん 2人の職員は、自分が大人になった時の理想像でもありました。小中学生の時は憧れの人みたいな感じでしたから愛情は感じていました。

異動した後に高校生交流会で会いました。大好きな職員に「本当に成長したね」って言われてうれしかったです。やはり、こうやって信頼できる先生がいたから、担当が代わっても、ルール破ることがあっても、これ以上やっちゃいけないなっていう線を引けたのだと思います。

編集部 苦手な職員もいましたか？

Kさん 怒り口調な職員さんや叱るときに子どもに対してひどいことをいう職員さんは苦手でした。怒られた時は中学生の時は言い返していました。「なんでお前にいわれないかんの」と思い高校生になると聞き流していました。私は苦手な職員さんだったけど、その職員を好きな子どももいたので相性もあるのかなと思います。子どもの時に職員と愛着っていうか、信頼関係が築けていない子っていうのは、ほとんどの人が高校卒業してからぐれていますよ。

編集部 関係が築けなかった子ってなんで築けなかったのだと思う？

Kさん 気にかけてくれる先生がいるのですが、その先生の事を次々に裏切って信じてもらえなくなっちゃった感じでした。

私も悪いことをしていた時期がありました。担当の職員が上に報告する時も一緒になって謝ってくれたりして、うまく話せない時は手紙で自分の気持ちを伝えたり返事を書いてもらったりもしていました。
職員の悲しそうな顔を見て「悲しませるのは止めよう、もう絶対しない」と思えました。

編集部 信頼関係がしっかりできていたのですね。乳児院のことは覚えているの？

Kさん 覚えてないです。

編集部 乳児院から児童養護に措置変更してくる子は乳児院でのアルバムを持ってくるよね。アルバムを見ると、しっかり愛情をかけてもらっていると感じます。

Kさん 見返します、見返します。大事にされたことを感じることができます。

編集部 小さなころから施設で育ってきた子は、自分たちが関わって関係を築いていくことができるけど、途中から入所してきた子との関係を築いていくことは大変だろうなと思うんだけど。
育て直しじゃないけど、気にかけてるよ、愛してるよと伝えていかないといけないよね。

保育士になって

編集部 自分が職員になってどうやって子どもと関わっていきたい？

Kさん 今、就職して絶対やっていることは、毎朝、出勤した時に全員一人一人に、ちゃんと目を見てあいさつをしています。本当に単純なことですけど、これは心掛けてやっていて。自分の担当の子だけでなく、1人で遊んでいて普段しゃべらない子とかも絶対に声掛けて、「ちゃんと見ているからね」じゃないですけど、この人がここにいると安心できるみたいな、安心感のある人、信頼できる人、そんな存在になれるように接しています。
　この初心がいつまで続くか…初心を忘れないように頑張っていきたいです。

最後に

Kさんは子どもたちにも自分自身が憧れた職員のような存在になれたら良いなと思い、そのためにはどうしたら良いのか考えて、一人一人とあいさつをしている。小さなことかもしれないけど、その積み重ねが大切と思っていると終始笑顔で話してくれました。

私たちは施設で子どもと出会い、あたり前に日々を過ごしている。子どもたちは不安の中、職員を頼りに生活をしていることを忘れてはいないか、私たちは、子どもたちを信じて向き合い大切に思っていることを伝えなくてはいけない。

Kさんの話を聞いているうちに私たちはKさんの笑顔に吸い込まれ、Kさんのことを好きになった。Kさんの職員に対する愛情と信頼は職員から受けた無償の愛の結果だと感じた。

私たちは子どもたちの人生に携わる素晴らしい（仕事）日々を過ごしていると実感した。出会いに感謝ができるKさんは愛情をいっぱい持った素敵な保育士さんでした。

Kさん、今日は素敵な出会いをありがとう。

特集：「要保護児童の愛着の絆を取り戻すために」2

私の思う愛着について

編集担当の3人から、「私の思う愛着について」を少し述べてみたいと思います。

渡邊美香（豊橋ひかり乳児院）

親が子どもに愛情を感じるのはいつからでしょう。子どもが親に愛情を感じるのはいつからでしょう？お腹にいる時？産まれた時？育っていく中で？それぞれが違うように、親が子へ、子が親へ愛情を感じるのは、人それぞれ違うのではないかと思います。

子育てをしていると楽しいこと、うれしいこと、怒れること、悩むこと、いろいろなことがあります。ひとつ悩みが解決したかと思うと、またひとつとなかなかゆっくりとはさせてもらえません。いつも、どうかかわったらいいのだろうと悩むことばかりでした。しかし、どんな時も「その時」を逃さず関わったり見守ったりしながら、一緒に時を重ねることで愛情も深みを増してきたのではないかと思います。

その関わり方で良かったのかわからないけれども、子どもと一緒に私も成長してきたように思います。

坂　直道（宇宙）

適切な愛着関係の下では、「自分自身の存在意識を確かめるため」や「自己を肯定できる」気持ちが育まれ、くじけそうな時に「頑張ろう」という気持ちになります。これは、社会生活を送っていく中や人間形成する上ではなくてはならないことだと思います。

では、愛着形成について自分の過去を思い出してみますと、家族との普段の何気ない応答的なやり取りが大切なように思うのです。施設で勤務しているとどうしても児童一人一人に費やす時間が少なくなってしまったり、忙しいことを言い訳に「あとにして」「待って」とつい言ってしまいますが、家庭では子どもの「ちょっと来てよ」「見て」などの子どもの「今」の気持ちに対応することができます。このように家庭と施設を比較できることではないかもしれませんが、意見や思いをその場で傾聴することで、受けとめられたと感じることが愛着を形成して行く上で大切だと思います。また、幼少期に使っていたものに愛着がわくように、人間だけでなく物にも愛着がわく時があります。これは長年使うことでも愛着が芽生えるようにも感じるので、愛着は長い時間かけて培われるもののように感じています。施設ではいびつな愛着の中で育ってきた児童に、スタンダードな愛着関係を形成できるように職員がチームとして連携し、退職しない環境の整備をすることで連続的な愛着形成が育まれるのだと考えます。

加藤　眞由美（あいさんテラス）

愛されているという実感は、ストレートにはなかなか感じないのかもしれませんが、守ってもらえる、安心して過ごせる関係ができていることだと考えます。そして、その人のそばにいることが心地よいと実感できることです。

自分が他者に対する思いやりの気持ちを持て、それによって愛情を伝えることもできる、人との関わりを円滑にするために大切なものを愛着から作られるのです。

毎日の生活の営みの中で形成されるもの、だから生活の中での一つ一つの子どもとの関わりが大切になります。人から人へ伝えられるものであるから、親自身の養育の基礎となる部分で愛着形成が上手くできていないと、子どもへ伝わることができないのです。そのことにより、良くない繰り返しとなっています。根が深く難しさを感じています。

広報担当の渡邊美香さんは、自身の子育てを通して、お子さんとの関係から、親子ともに成長しながら愛着を育んでいくのだと伝えています。ただ、子育ては親によって感情の揺さぶりを受けることが多く、また、正しい答えがない。しかし、その状態に目を反らさず向き合っていくことで、愛情は深まっていくのだと述べています。

坂さんは、自身のこれまでの家族との関係性を振り返っています。手の届くところに見守られている存在と実感を得ることにより、自分の中に起こっている「今の課題」を解決の方向に向かわせる。そのことは、人だけでなく、身近な物にも大切、愛おしい感情が沸き、自身の一部となり、生活の中に溶け込んでいくのだと。愛着は長い時間をかけて培われるものだと述べています。

最後に加藤さんは、愛着は毎日の生活の営みの中で形成される。そこに、安心して暮らせる関係性が築かれていること。それには、親自身の養育の基礎が影響する。人は与えられたものは受け継がれ、そして、また、同様に与え繰り返している。

3人の編集者の視点は違いますが、共通していることはそれぞれ自身の体験を通した内容であること、そして、愛着は時間をかけてお互いの関係性の中で形成されていくものだと述べています。

おわりに

今年度、広報として愛着を取り上げた理由の一つに、「日々関わっている子どもたちの課題（問題）はどこから来るのか。施設が担っている役割は、子どもの成長を適切に育めているだろうか。最近、なぜ愛着障害が注目されるのだろうか」という素朴な会話からでした。そして、日々、自問自答しながら実践をしながらも、これといった手ごたえも今一つの現状の中、実践者の足元を少しでも光が当たるように、愛着をテーマとして取り上げ、少しじっくりと考えてみたいと思ったのです。そのためにも、今年度で終えるのでなく、継続した特集として取り組めると、そこから新たに見えてくるものがあるように感じたからです。

愛着の問題は子どもだけでなく、大人にもその世代にも関係しており、愛着障害も含めて理解することが必要と考えます。それぞれの人が持つ愛着スタイルが対人関係だけでなく、その人の人生にも影響していることにも目を向ける必要があります。

まず、今回はそれぞれの分野で活躍されていらっしゃる方々に、愛着と関連したテーマで日々の実践や思いなどを述べていただきました。愛着とは一言では言い表せないテーマであるため、自由にさまざまな視点でちょっと立ち止まってみたいと思います。続きは、次回の号でお話しましょう…。

プティ ヴィラージュ　西川 富美子